

奥村隆著『反コミュニケーション（現代社会学ライブラリー 11）』弘文堂（2013年）

「コミュニケーション能力」という言葉をよく聞くようになったのはいつ頃からだろうか。「コミュニケーションスキル」という言葉も耳にする。企業の研修などではコミュニケーション能力（スキル）は重要なテーマであると聞く。経団連が毎年行っている調査^(注)でも、「選考時に重視する要素」として「コミュニケーション能力」が10年連続でトップを占めるという。就活生のみならず、現代に生きるわたしたちにとって、「コミュニケーション（能力／スキル）」は良きにつけ悪きにつけ、無関心ではいられないものであろう。

わたしはこうした状況を、情報化の進展とか、社会における多様性の進行などの変化と関連付けて、さもありませんかと思う一方で、違和感をおぼえてもきた。確かに、仕事の上で円滑なコミュニケーションが必要で望ましいものだという事はわかる。コミュニケーション不全によって問題が発生することを経験している。しかし、コミュニケーション能力を称揚する大合唱には何となく胡散臭さを感じる。それに、能力とかスキルは一般に、あるに越したことはないものと思いがちだが、本当にそうだろうか。何事も、良い面があればそうでない面もあるのではないか。みんながみんなコミュニケーションの達人になる必要があるのだろうか。

『反コミュニケーション』。刺激的なタイトルである。さらに、帯には『『よくわかりあう』コミュニケーションは楽しいだろうか』とある。これはキャッチーだと編集者(?)は思ったのだろう。その思惑にまんまとはまり買って読んでしまったわけだが、これが人目を惹く言葉なら、私の感じる違和感とはそれほど特殊なものではないのかも知れない。

本書は、刺激的なタイトルとは裏腹に、コミュニケーションについて「真面目」に追究した本である（もっとも、コミュニケーションをめぐるある種の真面目さに対する“解毒”を狙っているフシはあるが）。けれど、堅苦しくはない。ルソーにはじまり、ジンメル、ハーバーマス、鶴見俊輔、ベイトソン、ジラルド、ゴフマン、ルーマンなどなど、社会学者を中心に「思想界の大スターを歴訪」（帯の文句）しての架空対話が繰り広げられる。そこで目指されるのは、コミュニケーションをめぐる想像力を広げ、コミュニケーションから自由になる、あるいはコミュニケーションを自由にする、その糸口を探ることである。

著者はコミュニケーションを社会学の切り口で研究し、大学で「コミュニケーションの社会学」「自己と他者の社会学」などを講じている。だが、コミュニケーションは嫌いだという。嫌いで苦手だが、それなしには生きていけない、だからコミュニケーションについて考える、それが本書の出発点である。

「歴訪」のほんのさわりだけを紹介すると、障害物を取り去った完全な理解（「透明なコミュニケーション」）をめざすルソーに対し、ジンメルは「距離」をとり合うことで差異や「秘密」はそのままだけにかかわる「遊戯」としてのコミュニケーションを描く。ハーバーマスは真理・正当・誠実という基準を満たし「強制なき合意」に達するような「対話」としてのコミュニケーションに価値を置く。それらはいずれも「完全」なコミュニケーションを目指す「ユートピアニズム」である。しかし、鶴見俊輔との対話からは、不完全さを受け入れ、「ディスコミュニケーション」を直視する強さを持つことの必要性が浮かび上がる。。。。。

対話を繰り返すことで、個々の思想が相対化され、別の文脈に位置づけられる。そのことで新たな発見があり、行き止まりに思えた壁にドアが見出される。著者の思索はあちこちを飛び回っているように見えて、らせん状に深まっていくようでもあり、ちょっとしたミステリーツアーのようなワクワク感がある。

著者の嫌悪感や苦手意識は結局、「よくわかりあう」のが「よいコミュニケーション」だという前提（思い込み?）に向けられたものなのだろう。だから、コミュニケーションを自由にする事、想像力を広げることが目指される。他者が「あらゆる喜びと感動」の源泉であると同時に、「不幸と制約」の源泉でもある（見田宗介）という言葉がさす、コミュニケーションというものははらむ二重性や両義性、コミュニケーションを通じた変容などを取り込むことで、コミュニケーションをめぐる思考は大きく豊かに膨らんでいく。「他者は不気味で恐ろしい。だけど不気味な他者といえるのがうれしい」（本書終章）。矛盾しているようだがそのあたりにほんとうのこと、リアルな何かがあるのではないか。（湯浅 論）

(注)「新卒採用に関するアンケート調査」：2013年4月入社対象の調査は2013年11月実施、会員企業のうち1,301社を対象にして583社が回答（回収率44.8%）。